

安楽死：アメリカ司教の声明

安楽死を合法化しようとする現在の動きは、私たちの社会を非常に危険な目にさらそうとしています。最近、これらの動きは急激に人々の注目を浴びるようになってきました。というのも、自殺や二ニュースになったような事件の手法を説明する出版物が数多く出され、それによって家族や医師が末期症状の患者を死に追いやったり、患者が自らのいのちを絶つ手助けをしたりすることが容易になったからです。

殺人や自殺補助に反対する法律を見直そうという動きもあり、医師が末期患者に薬を与え過ぎたり、致死量の注射を打つことを認めさせようとすることもあります。

安楽死支持者たちは、人々の困惑、動揺、そして今日の延命技術への恐怖心につけ込んでいます。さらに、妊娠中絶に関する討議などから言葉を借りて、「選ぶ権利」を何よりも尊重しなければいけないと主張しています。自分の死ぬ時間や方法を選べるというところを、究極の自由として提示しているのです。ところが、自分のいのちを終わらせたり、医師にそれを行ってもらおうといった決断は、特別に負担のかかる治療を断るときに決断とはまったく違うことに彼

らは気づいていないようです。

カトリックの指導者として、また道徳教師として、いのちは愛する神からの最も基本となる贈り物であると私達は考えています。つまり、それに仕えることはあっても、決して支配するのではない贈り物なのです。私たちが伝統としてきた自分や他人の健全ないのちを守る道徳的義務は、私たちがそれぞれの局面において可能ならばどんな医学的処置を施してもいいといった見方が正しくないことを示しています。しかし、この伝統は、明らかにまた強力に、責任感のある保護者として人は自分の死を自ら招こうとしたり、罪のない犠牲者を死に追いやったりしてはいけないことも明示しています。第2回パチカン委員会は、「安楽死及び意図的な自殺」はいのちそのものに對する侮辱であり、「文明社会を毒殺する」ものであると宣言しています（現代世界憲章 第27）。

ローマ法王が述べたとおり、「何びともいかなる方法を使っても、胎児であれ赤ん坊であれ成人であれ、あるいは不治の病に苦しんだり死にかかっている人であれ、罪のない人間を殺すことを認めるようなことがあってはならない。」さらに、私たちには自分や自分を

頼ってくれる人のいのちを殺すことを人に頼むような権利はないのです。「またどんな権威者もそのような行為を合法的に勧めたり認めたりすることはできないのである。」こうして私たちは、「神聖な法の違反、人間の尊厳に對する侮辱、生に對する犯罪、そして人間性への攻撃」に立ち向かっているのです（安楽死に関する宣言、1980年）。

安楽死を合法化することは、人々の人権や平等に對する信念を裏切ることにもなります。もし生きる権利自体が価値を失うことがあれば、私たちが持つほかの権利は意味をなくしてしまいます。治療と殺人の境界線を破壊することは、古くからある法的、医学的伝統からの離脱を意味し、私たちの社会を構成する傷つきやすい人々を予測不可能な恐怖にさらすことになるのです。高齢者や障害者、エイズ患者や他の末期患者の利益を唱える人々は、殺される「自由」の選択を持ちかけられると本当に驚いています。

私たちはカトリック信者と善良な全ての人々に、安楽死を合法化しようとする提案を拒絶するよう呼びかけます。末期症状の患者を持つ家族には、人間の威厳にかかわる道徳の本質についてよく議論をし、患者が自分の将来について決断を迫

られたときにも無力感に陥ったりすることのないようにと訴えていきたいのです。そしてヘルス・ケアの専門家や立法者、その他この論争に関わるすべての人々には、不治の病の患者と、人間の生まれながらの価値を尊重するその家族、特に私たちの愛情と援助を必要としている人々が抱える問題の解決策を探るよう訴えかけていきたいものです。

respect life pamphlet

「安楽死させた」

一九九九年にノーベル平和賞を受賞した「国境なき医師団」の創設者、ベルナルド・クシュネル保健担当相（61）は、二十五日発売のオランダ誌「自由オランダ」で、医師団の一員として赴任したベトナムやレバノンで、患者を安楽死させていたと告白した。

同誌のインタビューで、クシュネル氏は、「死を控えた患者が非常に苦しんでいた時、何度も安楽死させた。世界中の医師が身に覚えのあることだ」と述べた。さらに、「私自身、体が全く動かなくなつた状態で、生き永らえたくないと語つた。クシュネル氏は、オランダ国会で安楽死法が成立した直後の今年四月、フランスでも安楽死法の検討を行うべきと訴えていた。安楽死実施の告白は、同国内の論議を呼びそつた。

読者新聞 2001.7.26

キャシーの中絶

発見

私が妊娠していることに初めて気づいたのは、24年前の七月でした。私は独身で、大学を出て「大都市」で一人暮らしをしていて、このままですぐに合格している法律学校へ入るべきかどうか考えているところでした。一九七五年の夏まで、私は結婚したいと思っていた男性と長い間交際していました。七月初めに、私は最悪の事態を心配し始めました。勇気を振り絞って、避妊薬をもらった病院へ妊娠検査を受けに行きました。

翌朝「陽性」の検査結果を電話で知らされたとき、私の心はずぐにどうしてよいかわからないパニックの状態になりました。私は確実に「危機」モードに入りかけていました。病院の人は、まだ先生の空いている時間があるから翌日中絶の予約はできると私に知らせてくれて、さらに費用は病院に来たときに払って下さいと教えてくれました。

私は、「どうしてよいかわからない。」「と彼女に言ったのを覚えています。彼女は、次の日病院に来れば「カウンセラー」と話が

せていたのです。

決心

できるとはっきり言いました。それで私は予約をして放心状態で電話を切りました。それから24時間、私は心が引き裂かれる思いがしました。中絶を受けなければ彼との関係そのものが危うくなると私はすぐ気がつきました。私は、赤ん坊と自分がかうすれば経済的に自活できるかしらと思いました。私は自分のことと、赤ん坊がいると私はどうなるだろうかということばかり考えていたので、赤ん坊のことはほとんど考えませんでした。私が陥っているひどい窮地から抜け出すために、何かを、いや何でも、する決断をしなければなりません。一時間が過ぎる毎に無力感を感じ、どうしていいかわからなくなりました。私は祈ってみましたが、神様とはあまりにかけ離れている感じがしました。私は町に住んでいる祖母に電話をして、その夜泊めてもらえないか尋ねました。一方で私は心から誰かに、いえ誰でも、私が唯一の解決策だと思っているものから、私を救い出してほしかったのです。そしてもう一方では、中絶をして、片を付けて、全てを忘れて、二度と起こらないようにしようと思

その夜、私は祖母に妊娠のこととは一言も話しませんでした。そして翌朝祖母の家を出る時までに私の感覚はなくなってしまうと感じました。しかし病院までの道を車を運転しながら、「生まれる権利：中絶反対団体」と白い大きな文字で書かれた青色の大きな看板を見上げたことをはっきりと覚えています。私は大きな声で、「たぶん病院へ行く代わりにそこへ行ったほうがいいのね。」と言ったことを覚えています。しかし、私のボーイフレンドは、それは最悪の方法だと私にはっきりと言ったのです。

中絶

その夜、私は祖母に妊娠のこととは一言も話しませんでした。そして翌朝祖母の家を出る時までに私の感覚はなくなってしまうと感じました。しかし病院までの道を車を運転しながら、「生まれる権利：中絶反対団体」と白い大きな文字で書かれた青色の大きな看板を見上げたことをはっきりと覚えています。私は大きな声で、「たぶん病院へ行く代わりにそこへ行ったほうがいいのね。」と言ったことを覚えています。しかし、私のボーイフレンドは、それは最悪の方法だと私にはっきりと言ったのです。

カウンセラーは私の資料をすべて集め、お金を受け取り、いくつかの質問をしてから、未婚であること、一人暮らしであること、仕事のこと、妊娠してまだ6、7週間にしかならないことなど、私の状況を考えれば、中絶が私にとってふさわしい選択だとはっきりと言いました。私のカウンセリングに要した時間は5分に満たないものでした。それから私は、私がまだ会ったこともない、私のことを何も知らない、私に何も言わない医者待つ部屋に入ったのです。

人生は続く

一時間たたないうちに、私は帰宅の途につきました。私が妊娠を知って中絶を受けるまでの時間は24時間をほんの少し越えていただけでした。帰宅途中で、私は、これで誰も私が妊娠していたことを知らないし、人生をやつていくことができるという安堵感がこみあげてきました。

私は休息をとるようにと指示を受けて病院を後にしましたが、出血がひどくかなり激しい腹痛を経験しました。7日後私は合併症のために外来手術を受けるために入院していました。私は回復し、妊娠していたことを忘れる決心をしました。そして6年間をただそうしてすごしたのです。

彼と私の関係はだんだんとだめになっていき一年半後完全に終わりました。私は法律学校に一度も行くことがありませんでした。私は新しい仕事に就いて、友達や家族とうまくやって、最終的に今の夫と結婚しました。彼は私の人生に吹き込んださわやかな風のような人で、小学校からの知り合いです。しかし多くの点で私は、「自動操縦」のような暮らし方をしています。私はもはや中絶と水面下で頭をもたげつつあった罪悪感を意識的につなぎあわせるこ

とはしませんでした。

再び妊娠

6年後私は一番上の息子を妊娠し、母親になることを心から楽しみにしていました。しかし私はまた、何年も前に中絶した子どもの思いがますます強くなっていることに気づきました。そして胎児の発育の全段階を明確に記載している赤ん坊の写真や本やパンフレットに文字通り囲まれるようになるにつれて、今までのように否定し続けることがだんだんと困難になってきました。

予定日が近づくにつれて合併症を経験し、赤ん坊の健康にとって重大な医学上の懸念が起りました。何年かぶりに不安と罪悪感と自暴自棄と良心の呵責の念が私に押し寄せてきました。私は神様に向かって大声を上げ、私が犯したこのために神様が私の赤ん坊に害を与えないように祈りました。

ありがたいことに、それからまもなく息子は生まれ健康そのものでした。しかし、妊娠の最後の数週間表面に表れた感情はもはや押しつけることはできませんでした。私はそれに気づき、ダビデが書いているように、「私の罪はずっと私の前にあるであらう。」(詩篇 五一：3)と感じ

それから一年半、私は情緒的、精神的レベルで、神様と神様の許しを必死に求めました。

神の恵み

一九八二年の夏、娘が誕生してまもなく、私は初めて、イエス・キリストが、私との個人的な関係をいかに望んでおられるかということを感じました。私は、神様が私を愛してくださり、ずっと私を見て下さったことを理解し始めました。私は神

様がずっとそこにいてくださり、私が去っても神様はどこへも行かなかったことがわかるようになったのです。私は神様の驚くほどの恵みと慈悲を知り経験し始めたのです。

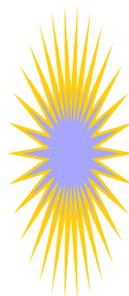
私はまた、何年ぶりかで安らぎを経験しました。私は神の真実が私の心の奥底にまで到達するようになりました。その真実とは、最初の子を中絶した際に私が行ったことについての真実と、私を彼の子にして私を許して下さる際に私に対して神様がしてくださったことについての真実です。

今では私は「PCO」(資格を持つたプロの臨床カウンセラー)として働いています。私自身の人生に及ぼした神様の影響の結果として、危機的な妊娠の最中にいる人ばかりでなく、中絶の後遺症にもがいている女性たちのケアをする特権をも得ることができました。実際、中絶の情緒的、精神的な傷は深いのですが、それよりも神の愛は深いのです。

中絶の痛みを経験して公然と歩き、失った子どもたちに対する怒りや罪悪感、拒絶、悲しみに公然と立ち向かってきた人たちは、自分たちの人生の中に、自分たちを愛し、許し、希望を与えてくれる神様の非常に大きな存在を発見したのです。

パウロはコリント人を次のように励ましました。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にもいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。」(コリント人への第二の手紙 一：3-4)パウロの励ましは、私たちが女性に悲しみや心の傷を癒し、最終的に神と、自分自身と、そしてわが子と和解できる場所を提供する時に、私たちがキリストのようになれる機会が与えられていることを思い出させてくれるのです。

preaby@centansprolife.com



安楽死

日本プロ・ライフ・ムーブメントは、生命の神聖さと個人の尊厳を支えるために、いわゆる絶望的な場合や不治の病と見なされた人に安楽死を執行することを無条件に拒否します。カトリック教会によって表されているように、自殺補助は道徳的に受け入れがたいものです。故に、苦痛を除去するために死を招く行動や怠慢は、人間の尊厳と全く相反する殺人という要素で構成されるのです。

中絶と安楽死との間の連鎖は、過去20年の間に段々より明確になってきました。中絶も安楽死

も両方とも生命を終わらせるものです。いずれも古い医学的、道徳的、且つ法的な疑いによって非難されています。そして、また、いずれも問題の解決法として無実の人を直接殺すことの道義を現在の法律に持ち出しています。そのようなにして、聖書が子どもに関心や同情を全く示さない最も横柄な国と呼んでいる(第二法の書 二十八：50)古代アッシリアと同等に私達の国をそのようにしているのです。

これは、何故熱心な中絶支持者がほとんど全て安楽死支持者であるのかの説明になります。例えば、中絶支持の神学者であるジョセフ・フレッチャー(状況倫理学の父)は、故医療寄稿家のウォルター・アルバレス博士や「家族計

画連盟」の故アラン・グットマツハール博士と同様に、安楽死教育会(現在の「コンサーン・フォア・ダイニング」)の重役会の一員でした。

安楽死支持者は、産まれてこぬ赤ちゃんを殺すことができるのなら、他の人間も殺すことができる」と主張します。一九七三年の「アメリカン・ジャーナル・オブ・ナーシング」に掲載された記事では、ジョセフ・フレッチャーは肯定的な安楽死を認めないのに、未成熟な人間のいのちを終わらせる中絶を倫理的に認可するのはばかげていると述べています。つまり、もし羊水診断でひどく不完全な胎児が発覚した場合、妊娠に終止符を打つという道徳的な義務を私たち

が負わされているとしたならば、同等に、脳を精査して、癌細胞が脳にまで移転したと発覚した患者の希望のない惨めさに終止符を打つという義務を負わされているというのです。

私たちはもっと最近、これと同じ連鎖をミシガン州のジャック・ケボルキアン医師の裁判と控訴裁判所のワシントン州の医師による自殺補助禁止令をひっくり返す判決とに見ることができました。この論理は不可避なものなのです。もし医師が子どもを殺す(中絶)ためのお金を親から受け取るのであれば、両親を殺す(安楽死)ためのお金を子どもから受け取らないように妨げることができるのでしょうか。

ある考え

安楽死は人間を意図的に殺すものである。それが高齢だろうと、障害だろうと、障害を伴う出産であろうと、大体が同情的な理由からとられる措置である。中でも感情的あるいは精神的に知能の遅れた人々が最も安楽死を迫られやすいのではないだろうか。すでに今日の社会には、家の内外から押し寄せてくる日々の生活の安全に不安を抱いている弱々しいお年寄りがたくさんいる。その彼らにさらに重くのしかかるのは、面倒を見てくれる周囲の人々やマスコミから安楽死という概念を思い起こさせられた時であろう。

NRL internet position papers

プロ・ライフ

オレゴン州の障害者、自殺幫助に『ノー』

ジャニス・エルズナーは子ども
のころから車椅子に頼る生活をし
てきたが、17歳になる娘が大学に
入学するまでは、現在急速に進行
している筋萎縮症が彼女のいのち
を奪うことがないことを祈ってい
る。「この願いがかなったら、こ
れ以上の喜びはありません。」と
彼女は言った。

耐え難い痛みと、身体を動かす
ことのできない不自由さがあつて
も、エルズナーは決して自らのい
ちを絶つことはしないと決めてい
る。だから彼女は、末期症状の患
者に医師が自殺幫助を行うことを
認める決定をした政府の幹部たち
はとんでもない間違いをおかした
と感じている。

だからこそ彼女は、自殺幫助を
認める法案を無効にさせる訴訟に
参加したのである。また、だから
こそこの法案を破棄する十一月四
日の第51法案に関する投票を支
持したのであった。エルズナーは
耐え難い痛みに苦しむ人々がなぜ
自らのいのちを絶つととするのかは
理解している。彼女自身、つい
一ヶ月前に肺炎の発作に苦しみ、
自殺幫助という手段を考えたこと
があったからである。

「あの痛みはほんとうに苦しい

ものだった。もうこれ以上こん
な思いはしたくない。」と家族に
言ったものだった。「すると夫
は、『こうなるから自殺幫助は認
めるべきではないのだ。あまり
にも簡単にいのちを奪いすぎる
から』、と言ったのでした。」

エルズナーは8歳の時に筋萎
縮症にかかった。この病気を患
う人で20歳半ばまで生き延びる
人はほとんどいない。だから、48
歳まで生きているエルズナーは
非常に珍しいケースである。主
治医は彼女と個人的にも親しい
人で、彼女があとどれだけ生き
られるかは決して見極めようと
しなかった。「彼は絶対に具体的
な日にちを言わなかった。」と彼
女は振り返る。

エルズナーの信念の核となる
のは、いのちはどのような場合
でも授けられたものであるとい
う考えである。自殺を手助けす
ることは、まったく正反対の
メッセージを送ることになる、
と彼女は思っている。「邪魔にな
る人がいれば、その人を捨て
去ってしまう。それが将来どん
なことを招くのかなんて、誰に
もわからない。」と彼女は言う。
エルズナーはもう先が長くな

いと感じている人もいるだろう。
不自由になった両足以外にも、
彼女の両腕はしわしわになって
曲がっている。

「結婚したころは歩くこと以外
はなんでも自分でできたのです。
皿洗いや料理、手を伸ばして物
をとる、洗濯物をたたむなど、な
んでもやっていました。でも今
はここに座っていることしかで
きなくなっているのです。」

ポートランド市の東部にある
彼女の家には毎朝手伝いの女性
がやってきて、エルズナーを車
椅子に乗せるのを手伝ったり、
皿洗いやほかの家事をやってく
れる。エルズナーは午後は一
人でベッドの中で過ごす。その間、
彼女は高校三年生の娘のことを
いつも考えているのであった。
つい最近知人が訪問した際、
エルズナーは娘のために大学入
試申込書をせわしく見ていた

という。

娘のバネッサが早産だったこ
とを思い出すと、彼女は涙ぐん
でしまう。新生児の集中治療室
に入れられた娘に、看護婦が必
死に流動食を点滴してなんとか
いのちをもたそうと努力してく
れていた。「私たちにはいのちし
かないんだ、ということをつく
づく感じます。何ものにも変え
ることのできないかけがえのな
いものなのです。」と彼女は言
う。

オレゴン州では、自殺幫助は
あと六ヶ月以内のいのちと診断
された末期患者にのみ認められ
ている。しかし、これが娘のパ
ネッサやほかの十代の若者たち
に、苦しい時には自殺という手
段を選んでもいいという誤った
メッセージを伝えることになる
のではないかとエルズナーは恐
れている。

「一体私たちは子どもに何を教
えているのでしょうか？十代の
若者にとつて、すべての問題が
深刻で重大であり、なにもかも
一刻を争うものなのに。」と彼女
は心配する。

さらにエルズナーは、自殺幫
助法が末期患者の中でも特に医
療に落胆した人や、家族に経済
的負担を負わせていると感じる
人間的を絞っているような感じ
がすることに懸念を抱いてい
る。エルズナーは、自分は常に家
族の愛情と献身につつまれてき
たのだが、中には家族に見捨て
られることの羞恥心や恐怖心か
ら自殺幫助を選択する人がいる
のではないかと心配している。

「誰にもそれぞれのものがきとい
うのはあるでしょう。落ち込ん
で自分がみじめに思うとき、『誰
か私を殺して！』と言いたくな
るようなこともあるでしょう。
でも、こんな時こそ助けが必要
なのです。私たちは誰もが互
いのことを大切にしなければい
けないのです。」

ジャニス・エルズナー

安楽死の倫理的問題

オランダにおける医師による
死亡幫助は合衆国内の一部の自
殺幫助支持者たちから模範と見
なされているが、その実態の新

たな分析結果は次のことを示唆
している。同国では介護に当た
る人たちが次第に次の憂慮すべ
きステップをとるようになって

不穏な傾向

きている。つまり患者本人の許
可なしに安楽死させるように
なってきているということであ
(5ページへ)

(4ページから)

る。この考察は、一九九九年公表されて自殺補助(オランダではある条件下では犯罪にあたらな
い)が人道的に適用できる証拠として広く解釈されてしまった
オランダ政府のデータと矛盾するものであり、自殺補助に反対
する米国民にますます危険の念を抱かせるものである。医師
による自殺補助は米国ではほと
んどの州で有罪となっており、
係争中の裁判の判決はこの夏最
高裁から下される見込みである。

アメリカ医学協会(AMA)
ジャーナルに公表された論評に
よると、先の論文は「道徳的、人
道的社会の住人である我々が無
視することの出来ない重大な問
題を提起」する「警告灯」である。
こう述べたのは、ニューヨーク
に本拠地を置く医師による自殺
補助に反対する団体、「チョイス
・イン・ダイイング」の代表、
カレン・オーロフ・カプランであ
る。「オランダの例を見ても分か
るように、この件に関しては
我々はとてども慎重に行動しなけ
ればならない」

しかしこれまでの調査に携
わったオランダ人研究員は、今
回の新たな分析には「間違い」が
あり、「根拠が無い」として異論
を唱えた。医師であり道徳家だ
であるユトレヒト大学のヨハネス・
ヴァン・デルデン博士は、あるイ

ンタビューの中でこう述べてい
る。「あの論文は我々オランダ人
が気に入らない人たちをどんど
ん殺しているかのような印象を
与える。ばかげた話だ」博士を含
め何人かの人は、論文の執筆者
三人のうち二人は、医師による
自殺補助の反対者として名の知
れた人たちだと指摘している。

にもかかわらず、論文は非常
に重要な問題を提起している。
すなわち、末期が近づいた患者
が死にたいという意志表示をし
ている場合、医師にそれをかな
えさせることを認めてしまうと、
ブレイキが効かなくなり、手当
たり次第に患者を安楽死させる
ことにならないだろうか?とい
うことである。オランダ政府の研
究員の推定では、患者の明確な
同意なしで安楽死措置が取られ
たケースは一九九〇年には一〇
三〇件(88%)、一九九五年には
九四八件(97%)であった。

一九九九年十一月にニュー・
イングランド医学ジャーナルに
掲載されたこの調査結果に、医
師による自殺補助の支持者たち
は好意的な評価を下した。シア
トルに本拠地を置く「コンパッ
ション・イン・ダイイング」とい
う団体は、「この結果は、オラン
ダの医師たちが責任を持って慎
重に死亡補助しているという事
実を裏付けるものである」と述
べた。医師による自殺補助を禁

じているワシントン州の条例に
対して同団体が起こした訴訟は、
最高裁に持ち込まれた二件の訴
訟のうちの一つである。

「オランダは危険な坂道を転げ
落ちようとしているのか?」
ニュー・イングランド医学
ジャーナルの編集長マーシャ・
エンジェルは紙上で問いかけた。
「それは見えない」というのがそ
の答えであった。

AMAジャーナルの記事は、同
じオランダのデータを扱いなが
らも全く違った結論に達してい
る。二つの相反する結論が導き
出された理由は、患者の苦痛を
和らげるため麻酔薬が多量に投
与されて死に至ったケースの解
釈の違いによる。オランダで、そ
のような原因で死亡した人は一
九九〇年には推定一三五〇人で
あったが、一九九五年には一八
九六人に増加した。以前のオラ
ンダの研究報告はそうしたケー
スを安楽死または医師による自
殺補助として数えていなかった
のである。

しかし新たな研究論文の執筆
者たちは、一九九五年の鎮静剤
に誘発された死亡例のうち80%
は患者の明白な同意なしで起き
たというオランダの研究者の推
定値を用いて次のような結論を
導き出している。すなわち、「患
者が望んでいないのに死亡させ
られたケースが著しく増加」し

ていたというものである。「オラ
ンダの末期患者に対するケアは、
我が国のものより劣っている。
なぜならオランダには安楽死が
あるから」と、論文の主任執筆者
であり、安楽死に反対するアメ
リカ自殺防止財団のハーバート・
ヘンディン博士は述べた。ヘン
ディン氏は著書「セデュースト・
バイ・デス(死の誘惑)」を執筆
するにあたって、調査のため一
九九三年から一九九六年の間に
四回オランダを訪れた、と言っ
ている。

論文の共同執筆者であり、
ハーグの司法省の犯罪学者であ
るクリス・ルーテンフラン氏は、
この研究における分析結果は、
オランダ国内の一九九五年の医
師による死亡補助全体のうち半
数近く(六三六八のうち二八四
四件)が、患者の意志によるもの
ではなかったということを示し
ている、と述べた。「本人ではな
く、医者が判断を下してしまっ
たケースが余りにも多すぎる」と
いう。

ルーテンフラン氏によると、
オランダの研究者たちは、研究
課題に添うように報告書の中身
を歪曲したという。「彼らはとに
かく安楽死に賛成だから、安楽
死の良くない結果が非常に明ら
かであるにもかかわらず、報告
書の中ではそれを出来るだけ隠
そうとした」

ヴァン・デルデン博士は彼ら
の研究を擁護して次のように述
べた。新たな分析は単に言語学
上のちよつとした不都合を捕ら
えたに過ぎない。安楽死という
言葉の定義には同意に基づくと
いう意味が含まれており、だか
らオランダの研究者たちは鎮静
剤による死亡例を安楽死とは分
類しなかった。しかし博士は、鎮
静剤による死亡はこの問題の全
体像を理解する上で非常に重要
である、と認めている。

「鎮静剤による死亡例は、安楽
死に非常に近いものとして取り
扱うべきだと思ふ。それより気
になるのは、オランダの研究報
告を批判する人々が、原因は
我々オランダ人の道徳観にある
としている点である」と博士は
述べた。

AMAは医師による自殺補助に
断固として反対である。

テレンス・モンマー



雲行きが
怪しくなつて

プロ・ライフ資料紹介

401

【ビデオ】 沈黙の叫び

皆さん、ちょっと思い起こして下さい。あなたが小さかったころのことを！道ばたの犬に吠えられ、お母さんのもとに逃げ帰ったあのころ。また、友だちに虐められて泣きながら帰った日のこと。その恐ろしい時に、いつもにげて、助けを求めることが出来た日。

でも、ここに映っているおなかの赤ちゃんはどこにも逃げることが出来ません。助けを求めて、大きく口を開きましたが、その声は聞こえません。でも、恐ろしさに声なき叫びをあげ、大きく口を開いたのを確かに私達は見つめることが出来ます。この赤ちゃんは生きています。月が満ちれば、私達の住むこの地球に姿をあらわせます。

私達は一足先にこの地球の住民になっただけなのに、私達は何をしようとしているのでしょうか。

地球の人口が多すぎて、食糧難が襲ってくると言われます。子どもが多ければ生活が大変と言われます。それらの言葉に私達は振り回されていないでしょうか。考えてみましょう。まだ生まれていないけれど、確かにそこに存在しているいのちを取り除いて、私達の家庭は楽になり、幸せになるのでしょうか？飽食の時代と言われる今の世界で、一部の地域に食べる物もない程の貧しさが片寄っているのは何を意味しているのでしょうか？

私達は地球家族。小さないのちを守ることは、すなわち、自分をも守ることになることに気づきましょう。目に映るこの赤ちゃんの声なき叫びを聞き取って下さい。最後に出てくる女性達のあの苦しみ、悲しみの表情を私達の周りの人々がすることのないように述べ伝えましょう。小さないのちの鼓動を聞き続けるために私達のしなければいけないことを！

このビデオをたった一回見るだけで、あなたの脳裏にいのちの重みがずっしりと焼きつくでしょう。

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬：ピル

注文：	1 - - - - - 5	1部 = ¥ 100
	6 - - - - - 20	1部 = ¥ 75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ¥ 50
	1000 - - 以上	1部 = ¥ 35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

【本】 いのちへのまなざし

あなたの周りで小さなグループをつくりましょう。そして、少しずつ皆でこの本を読むことはどうでしょうか？日本カトリック司教団が書き著したこの本によって、いのちを守る運動がこの日本の地に広がっていきますように、まずは、あなたから読みはじめましょう。

1冊 300円 + 郵送料

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文 無料 + 郵送料

【カラー・パンフレット】

[201] 生か死 + 郵送料
 [202] 第二の処女生 + 郵送料
 [203] デート + 郵送料
 [204] どうするの? + 郵送料
 [205] "NO" という技術 + 郵送料
 [206] テイーンの出産コントロール + 郵送料
 [207] パージンの瀬戸際 + 郵送料
 [208] していましたが + 郵送料
 [209] 親権限と「10代の性」 + 郵送料
 [210] 貞節のすすめ + 郵送料
 [211] 中絶行為は女性を解放しない + 郵送料

【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット=カード+人形」 30円 + 郵送料
 [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン 200円 + 郵送料
 [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス 500円 + 郵送料
 [305] 胎児の人権宣言カード 30枚=100円 + 郵送料
 [306] ミニソフィア Ace エース(税別) 7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

[401] 沈黙の叫び ... (VHS/Beta) 7000 + 郵送料
 [403] ビリングス・メソッド (VHS/Beta) 7000 + 郵送料
 [404] いのちーおくりもの (VHS) 13000 + 郵送料
 [407] 命美しいもの = one&only (VHS) 20000 + 郵送料
 [409] 聞こえる? 天使の鼓動 (VHS) 6000 + 郵送料
 [410] ピル先進国・英国からの警告 ... (VHS) 15000 + 郵送料
 [411] (ロース・セマナー) エイズ時代の性倫理 ... (VHS) 3800 + 郵送料
 [500] (本) 生命問題に関する ... (カトリックの教え) 2987 + 郵送料
 [501] (本) 自然な家族計画 ... (ビリングス・メソッド) 1000 + 郵送料
 [503] (本) プロ・ライフの旅 300 + 郵送料
 [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ 1200 + 郵送料
 [505] (本) いのちをみつめて 500 + 郵送料
 [506] (本) 命あるすべてのものに (マザー・テレサ) 660 + 郵送料
 [507] (本) 私の生命を奪わないで 2300 + 郵送料
 [508] (本) いのちの福音 1500 + 郵送料
 [509] (本) 小さき生命のために 1300 + 郵送料
 [511] (本) 赤ちゃん：最初の十ヶ月 ... 12ページ ... 100 + 郵送料
 [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて 300 + 郵送料
 [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント 500 + 郵送料
 [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう 300 + 郵送料
 [515] (本) 経口避妊薬：ピル 100 + 郵送料
 [516] (本) いのちの福音と教育 1470 + 郵送料
 [517] (本) フマネ・ヴィテ 300 + 郵送料

(本) フマネ・ヴィテ

1 ~ ~ 30 1部 = 250円
 31 ~ ~ 100 1部 = 200円
 101 ~ ~ 以上 1部 = 150円

パンフレット申し込み

1 ~ ~ 5 1部 = 35円
 6 ~ ~ 100 1部 = 25円
 101 ~ ~ 500 1部 = 20円
 501 ~ ~ 以上 1部 = 15円

は自由です
 組み合わせ

十代の性 (17)

質問：彼女とは恋人としてではなく、いい友達としてつきあいたいと、うまく伝えるにはどうすればいいでしょう？この前、彼女から、一对一の交際をしたいというようなことをほめかされました。僕達はまだ16歳なのに。

デートを重ね、

親しくなったら

『若者の声』

★ おろせばいい？

一言で「中絶」と言ってしまうと聞き流してしまいそうな言葉であるが、決してそんな単純なものでは無いと思つた。バケツの中に捨てられた赤ちゃんが私達と何の変わりもない人間であるのに、すでに殺されているのかと思うとぞつとしてしまう。母親の胎内にいるとはいつても、生きている一人の人間が死んだという感じは、母親にとって耐えられない苦しみだろうと思つた。

しかし今、中絶することに何の抵抗もない女性もいる。そして男性の中にも「おろせばいい」と考えている人がいることも事実だ。私はそんな人達は、もつと命の大切さを知るべきだとつくづく思つた。そうでなければ、これから生きるために産まれた一つの命が消され続けてしまう。いろんな理由があるから中絶を100%否定してしまうことは出来ない。しかし女性の心に残る傷や残酷にも殺されて行く子どもの苦しみを私達は深く考えなければならぬ。そして自分勝手に中絶に頼るようになってはいけないと思つた。

S・Nさん「高三生」

Q&A

★ 赤いピン

私はこのビデオは高校生は見るべきだと思う。中絶という本当の恐ろしさ、残酷さが分かるだろう。私は胎児の残骸の入った赤いピンを忘れることができない。一日に四千もの胎児が殺されている。これは許されないことである。私達自身が中絶の残酷さを知り、このような事が起きないようにしなくてはならない。

しかし、中絶する女性にもそれなりの理由はあるだろう。経済的、身体的理由。子どもが障害を持って生まれると分かってまで産もうとは思わないかもしれない。だからといって人間を殺していいわけがない。これは人殺しである。あのバラバラにされた子ども達を見れば誰だつて思うだろう。これ以上中絶が増えないように私達は正しく考え、正しく判断し、正しく行動しなければならぬ。

E・Yさん「高三生」

答え：こんな言い方はどうでしょう。「君」といって楽しいし大好きだよ。でも僕らはまだ若いし、もつといるんなら友達とつきあつて興味を広げるべきだと思う。まだ一对一の交際には早い気がするし、いい友達でいたいんだ。こう伝えたからには彼女と毎週会ったりせず、大勢の友達とつきあひ、行動で示さなければなりません。

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話 / Fax 088-873-3619

e-mail: prolife@i-kochi.or.jp

For English Speaking People / evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 10:00 - 17:00

土曜日 休み

日曜日 休み

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

現在口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

暑い夏が行くと、必ずめぐってくる紅葉の秋、皆様にはお元気で過ごしてでしょうか。

明石歩道橋事故の時、『茶髪の青年』がメディアで取りあげられていました。私達の弱さなのでしようか、往々にして、私達は目に見えている部分で判断してしまうことが多いのですが、実際は彼らには報道されていたような悪いことは何もなく、それどころか、携帯電話で大きな声で助けを求めていたり、小さい子どもを押し潰されないように引き上げていたとの証言が最終的には得られました。でも、最初の報道に彼らはどんなにか傷ついたかと思うとこちらの心も痛みます。

目に見えない部分、いのちのこともそうです。今、私達のそばにいます子どもや私達一人一人のいのちは守られて当たり前でも、私達の目に見えないいのちはいとも簡単に葬り去られていても、なかなか声をあげようとしなければ、中には、生まれてきて幼児虐待を受けるより良いと平気で言う人もいます。

事務所では、公立の中・高等学校へも順番にこのプロ・ライフ・ニュースを送り続けていのちの教育を訴えかけています。どうかこの運動を支えてください。あなたが読みになったニュースを誰かに譲って、その方にもこの運動への金銭的支援を訴えてください。今、事務所は金銭的にピンチに陥っています。ご支援とご協力をどうか宜しくお願い致します。

八月号でもお伝え致しましたが、事務所ではホームページを開いています。そのアドレスは <http://www.japan-lifeissues.net> です。過去からのこのプロ・ライフ・ニュースはもちろん、それ以外の新しい記事があなたの目に触れるのを待っています。

日本プロ・ライフ・ムーブメント